接頭辞 RE の機能

――先行研究の概観と今後の課題――

山　本　香　理

0. はじめに

接頭辞 RE[(1)]の意味について，辞書の中では様々な分類が示されている．例えば，*Le Grand Robert de la langue française* では次のようなものが示されている[(2)]：

1）後退（le fait de ramener en arrière）：*rabattre, recourber, reculer, retirer,* etc.

2）元の状態への回帰（le retour à un état antérieur）：*ramener, refermer, rétablir, rhabiller,* etc.

3）繰り返し（la répétition）：*redire, refaire, rejouer, réaffirmer,* etc.

4）強度・完遂（le renforcement, l'achèvement）：*réunir, ramasser, relier,* etc.

5）RE を付加する前の動詞と同義（Sens équivalent de celui de la forme simple moins usitée ou réservée à d'autres emplois）：*raccourcir, raffermir, ralentir, récurer, remplir, rentrer,* etc.

本研究では，様々な用法に通底する RE の本質的機能を明らかにするために，まず先行研究の論旨を概観する．そして，従来の研究で記述が不十分である点を指摘し，今後の課題を示す．

1. 先 行 研 究

RE の本質的機能についての先行研究は，大きく四つに分けることができる．以下では，それらを概観する．

1. 1. Dolbec（1988）

Mascherin（2007）の記述によれば，Dolbec（1988）は，RE を用いる場合は，三つの事態（x, x′, x″）が関わると指摘している．x は発話の中で述べられる事態であり，x′ は x の前提とされる事態である．両者は観念的に同じものであり得るが，事態そのものは別個のものであるため，両者の間には断絶状態である x″がある．例えば，Pierre a revu Marie hier という発話によってなされる操作は次の通りである．まず，Marie との再会（x）が述べられる．次に，この事態の前提である Marie と会うこと（x′）が x より前の時点に位置付けられる．そして，両者の間には Paul が Marie に会っていない状態（x″）がある．これらの事柄を図示すると以下のようになる：

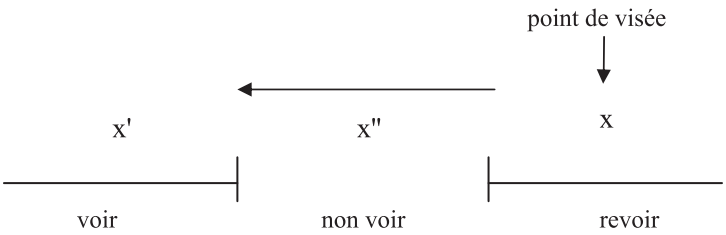


図 1

以上のようにして発話が解釈されることから Dolbec は RE を回顧的な関係を示すオペレーター（opérateur de relation à caractère rétrospectif）と呼んでいる(3)．

上の例のように，x と x′ が観念的に同一である場合は，RE は「反復」を

表すが，前提となる事態の特性に応じて異なった解釈が生じる．Dolbec は従来の RE の解釈が以下のような経緯で生じると述べている：

（ i ）元の状態への回帰（retour à l'état antérieur）

（1） a. On songe à ***reprivatiser*** les banques.

b. Tous les assistants lui faisaient signe de ***revenir***.

（1 a）では，privatiser の表す事行の結果状態である être privatisé が前提とされ，（1 b）では，話題にしている人物 lui の元の位置づけが前提にされている．つまり，かつて銀行が民営であったことや，lui がある場所にいたことが前提となっており，再び民営化することや，lui がその場所に戻ることによって，元の状態を再現することになる．そのため，「元の状態への回帰」といった解釈が生じる．

（ ii ）空間的・概念的対立（opposition à l'action précédente）

（2） a. J'entre dans la maison et je ***ressors*** tout de suite.

b. Je cherche à ***revendre*** la maison que j'avais achetée à la campagne.

（2 a）の ressortir は，内から外への移動を表し，空間的に対になる移動を表す entrer を前提としている．そして，（2 b）では，revendre は家を売却することにより「所有から非所有」への移行を表し，概念的に対になる「非所有から所有」という関係を表す acheter を前提としている．このように ressortir と revendre は空間的・概念的に対になる事態を前提としているため「対立」という解釈が生じるのである．

（iii）強度（intensité）

（3） Votre visite va ***resserrer*** les liens d'amitié entre nos deux pays.

この発話では serrer の表す事行の強度を問題にしている．発話時点での両国の友好関係の強さが前提とされており，その強度は発話で話題にしている時

点と比べて弱い．そして，相手の訪問によって友好関係が強化されることを述べることから，「強度」という解釈が生じる．

このように，どの事態を前提にするかに応じて RE の解釈が異なる．前提にすることがあるのは以下のような要素である：事行，結果状態，元の状態，所与の事行と空間的・概念的に対立関係にあるもの，事行が内包する質や量．

1. 2. Amiot（2002），Apothéloz（2005）

Amiot（2002），Apothéloz（2005）は，RE の本質的機能は「反復（itération）」を表すことであると指摘している．そして，RE を動詞に付加する場合，Dolbec の指摘と同じく，三つの段階が関わると述べている．まず，第一の事態の生起があり，次にその事態が生起していない断絶状態がある．そして，最後に，第一の事態が再び生起するという流れになる．最初の二段階は前提であり，第三段階が．発話で述べようとするものである．

反復の対象は動詞の表す事行だけでなく様々な要素が対象となり，Amiot は，以下の三つのものを挙げている(4)：

（ｉ）事行

まず，反復の対象として，動詞の表す事行が挙げられる：

(4) a. Évidemment, Foloche ne mourut point. Elle fut seulement ***réopérée***.（Bazin cité par le *TLF* in Amiot 2002 : 3）

b. La danse reprit ; Vésalius ***réinvita*** Amalia de Cardenas, qui fit une plaisante moue.

（Borel cité par le *TLF* in Amiot 2002 : 3）.

上の例では，Foloche が以前手術を受けたことや Vésalius が以前 Amalia をダンスに誘ったことが前提としてあり，Foloche が再び手術を受けることや Vésalius が再び Amalia をダンスに誘うことが発話で述べようとする事態である．

また，事行の参与者が異なっていても，事行の反復を述べるために RE を

付加することもある．その例として renvoyer が挙げられている．

（5） Jean ***renvoie*** la balle à Marie.（*ibid.*：6）

この例では，以前 Marie が Jean にボールを投げたという前提があり，Jean が Marie にボールを投げることが発話で述べようとする事態である．（5）の renvoyer は前提とは逆方向への動きを表していることから，従来の分類の「逆方向への動き（mouvement d'inversion）」に相当すると指摘している．このように前提と発話の中で述べられる事態の間で動作主と受け手が異なっていても，envoyer という動作が繰り返されているため RE が付加されるのである．

（ii）事行＋結果状態

事行とその実現によって生じる結果状態も反復の対象になる．（6 a）では emmancher とその結果状態の «avoir un manche»，そして（6 b）では，boutonner と結果状態の «être boutonné»，最後の（6 c）では boiser と結果状態の «être boisé» が反復の対象である：

（6） a. Il faudrait ***remmancher*** le balai.

b. Elle ***reboutonna*** son manteau jusqu'au cou.

c. Après l'incendie, il faut ***reboiser*** les vastes étentues noircies.

（*ibid.*：8）

上の指摘を前提部と合わせると，次のような段階を経る際に RE を付加することになる：

（7） a. /emmancher un balai（résultat：le balai a un manche）/→/le balai n'a plus de manche/→/emmancher à nouveau le balai（résultat：le balai a à nouveau un manche）/

b. /boutonner un manteau（résultat：le manteau est boutonné）/→/le manteau a été déboutonné/→/boutonner à nouveau le manteau（résultat：le manteau est à nouveau boutonné）/

c. /boiser les vastes étendues noircies（résultat：les vastes éten-

dues noircies sont boisées)/→/les vastes étendues noircies ne sont plus boisées/→/boiser à nouveau les vastes étendues noircies (les vastes étendues noircies sont à nouveau boisées)/

(iii) 元の状態

上で見た reboiser に関しては，別の解釈が可能である．以前，森林に覆われていた土地が火災により焼失し，その土地に植樹するという解釈である．この解釈では，第一段階の植林するという行為は前提となっておらず，«être boisé» という元の状態が反復の対象となる．次の例に関しても同様のことが言える：

(8) Paul ***reconduit*** Marie à l'école. (*ibid.* : 16)

この例は二通りの解釈が可能である．まず，conduire の表す事行の反復としての解釈である．つまり，Paul が Marie を学校へ送ったという前提があり，再び学校へ送るという解釈である．

しかし，そうした前提がない場合でも (8) の発話が容認されることがある．それが二つ目の解釈である．この解釈での反復の対象は，「Marie が学校にいること」という Marie の元の状態である．つまり，「Marie が以前学校にいたこと」と「その後学校を離れたこと」が前提としてあり，再び Marie が学校にいるようにするために Paul が彼女を学校へ送るといった解釈である．この解釈の conduire が表す事行は反復の対象ではなく，Marie の元の状態を再現するための手段を表している．

Amiot はこうした解釈が可能なものとして ramener, remmener, raccompanger といった移動動詞のみを挙げているが，Apothéloz はさらに refermer, revendre, recharger を挙げている．Apothéloz は具体例を挙げていないが，例を補うと次のように説明できるだろう．(9 a) では「車のドアが閉まっていたこと」と「主体が車を出る際にドアを開けたこと」が前提としてある．そして再びドアを閉めることにより，「車のドアが閉まっている状態」を繰り返すことになる．また，(9 b) の revendre に関しては，「主体がアパートを

所有していなかったこと」と母親からアパートを相続することにより，「主体がアパートを所有したこと」が前提として存在する．そして，アパートを売却することにより，「主体がアパートを所有していない状態」を繰り返すといった具合である．

（9） a. Il sortit de la voiture, ***referma*** la portière.

（M. Levy, 2003, *Si c'était vrai*. . .）

b. A vingt-cinq ans il avait ***revendu*** le petit appartement que sa mère lui avait légué et partait en Europe,（. . .）.（*ibid.*）

1. 3. Jalenques（2001, 2002）

Amiot, Apothéloz, Dolbec の指摘とは異なり，Jalenques（2001, 2002）は RE の本質的機能は「変更（modification）」であると述べている．そして，RE を用いる際に関与する段階として二つの段階のみ認め，RE とは第一段階 P 1 によって設定された状況が第二段階 P 2 によって変更されることを表すものであると指摘している．P 1 とは P 2 に先行する何らかの動詞が表す事行であり，P 2 とは RE が付加される動詞の表す事行である．

例として，まず，reclasser を挙げている：

（10）le week-end dernier, Paul a ***reclassé*** ses timbres.

この例の RE は，従来，反復を表すものとして分類されてきた．しかし Jalenques の分析では，切手を並べたこと（P 1）によってできた並べ方が，新たに並び替えること（P 2）によって変更されたことを RE が表していると指摘する．

さらに次の例は，従来の「元の状態への回帰」に分類される例である．

（11）Si tu sors, n'oublie pas de ***refermer*** la porte derrière toi.（*ibid.* : 86）

この例について，Jalenques は，従来の説明とは異なり，refermer の RE は「扉が閉まっている状態」の反復を表しているのではないと指摘する．この例では，扉を開けること（P 1）によって生じた「扉が開いている状態」に，

閉めること（P 2）によって終止符が打たれたことが述べられており，RE は，上の reclasser と同様，変更を表すと分析する．

1. 4. Franckel（1989, 1997）

Franckel（1989）では，動詞に RE を付加する場合，発話者は二つの操作を行うとされている．第一の操作は，動詞の表す事行 P を時間軸に定位し，P の量・質的限定を行う．次の第二の操作はこの第一の操作で得られた量・質的限定に一致させて P を時間軸に定位する．このように，第二の操作は純然たる P の定位ではなく，発話者の主観的なフィルターを通して行うのである．

上の記述の具体例として，Franckel はいくつかの動詞を挙げて説明している．例えば，je lis と je relis の差異については次のように述べている．まず，je lis と述べる場合は，読む量についての限定は読む過程で行う．つまり，lire の時間軸への定位と量的限定を同時に行うのである．一方，je relis を用いる場合の量的限定は，lire の時間軸への定位とは切り離して行う．まず，第一の操作である lire の時間軸への定位によって読む量を定める．その読んだ量は再読する際の読むべき量といった一種の目標となる．次に，第二の操作として，第一の操作で定めた読書量と一致させて lire の時間軸への定位を行う．これらの事柄を図示すると次のように表せるだろう．黒い矢印は，主体が行う読書量を表し，白い矢印は既に定められた読書量を表している：



図 2

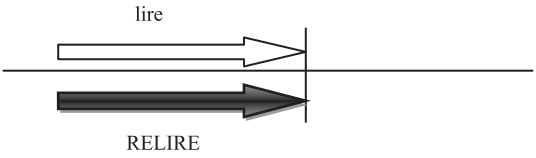


図 3

relire に関しては，第一の操作と第二の操作において時間軸に定位する P の量的限定が一致することから，結果的に RE は「反復」の価値を持つことになる．

ところで，第一の操作で時間軸に定位する P は以前に生起した事態であるとは限らない．また二つの操作の間で問題にする量・質的限定は異なることもあるようである．そうした例として，rallonger が挙げられている．例えば，rallonger un pantalon は，既にあるズボンの長さから，主体が望ましいと考える長さにすることを示す．つまり，発話現場にある P（avoir une longueur）をまず時間軸に定位し，そこから望ましい長さを想定する．そして，その量的限定と一致させた P（avoir la bonne longueur）を実現しようとすると rallonger を用いるのである．以上の事柄を図示すると以下のようになるだろう．上の例と同じく，黒い矢印は，主体が行う行為量を表し，白い矢印は実際にあるズボンの長さを表している．そして，点線の矢印は望ましい長さを表している：

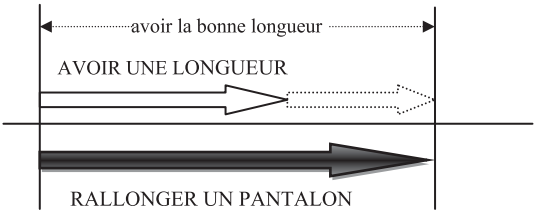
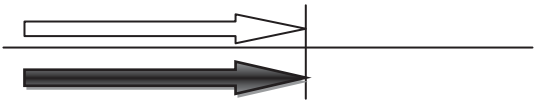


図 4

また，Les jours rallongent. に関しては，望ましい長さにするといった意図性を関与させることはできない．この場合，慣習から見通される長さへと日が長くなっていること表す：



LES JOURS RALLONGER

図 5

上のように用いられる rallonger は，従来の分類のなかで「やり直し・変更」に相当するだろう．

さらに，Franckel（1997）では，第二の操作について踏み込んだ記述をしている．この論考では，RE の動詞への付加は，質的限定が明確で，安定した位置付け（例えば，状態，局面，状況など）への移行を示すと指摘されている．この質的限定とは，RE を添える動詞の表す事行 P の時間軸への定位とは独立してなされるもので，起源，規範，限度，既知の事柄といった様々な要素に照らして定められる．そして，安定した位置付けとは，文脈によって「内部」,「良い」,「通常」,「既知」,「限定された」,「安定した」,「顕在化」といった解釈が与えられる．

例えば，上で見た relire は一度読んだものをもう一度読む「再読」の例であった．しかし，次の例のような，書いたものを点検のために読み返すという意味でも relire を用いることができる：

（12）Plus tard, alors que le jour pointait au travers des shojis, j'ai ***relu les cinquante pages écrites*** au cours de la nuit.

（R. Collasse, 2007, *La Trace*）

この解釈では，読むべき量は既に書かれたものに相当するが，「再読」の解釈と同様に，読書量は読む行為とは独立して規定されており，読書量は限定されたものである．そして，その限定された量に一致させて事行を実現しようとすると，relire を用いるのである．

それから，Franckel は，従来の研究で考察の対象とされなかった remarquer といった認知動詞についても説明を試みている．remarquer は潜在的で

ある対象が顕在化することを表す例として挙げられている．つまり，ある対象が識別しうる状態から識別された状態へと移行したことを述べる場合に re-marquer を用いるのである．

1. 5. 先行研究のまとめ

第一章では，RE の本質的機能についての以下の四つの仮説を見た：

（ⅰ）「回顧的オペレーター（opérateur de relation à caractère rétrospectif）」Dolbec（1988）

（ⅱ）「反復（itération）」Amiot（2002），Apothéloz（2005）

（ⅲ）「変更（modification）」Jalenques（2001, 2002）

（ⅳ）「質的限定が明確で安定した位置付けへの移行」Franckel（1989, 1997）

Dolbec, Amiot, Apothéloz で共通して指摘されている点は，RE を動詞に付加する場合に，発話者は三つの段階を考慮に入れており，最初の二つの段階が前提で，三つ目の段階が発話の中で述べようとする事態であるという点である．しかし，Amiot は「反復」を表すことが RE の本質的機能であると指摘する一方で，Dolbec はより抽象的な位置付けにとどまっている．さらに，「変更」を表すことが RE の本質的機能であると指摘する Jalenques に関しては，RE を動詞に付加する場合に関わる事態の数は二つであると指摘している．

そして，Dolbec と Amiot, Apothéloz は，前提となる要素または反復の対象として以下のものを挙げている：

Dolbec（1988）	Amiot（2002）, Apothéloz（2005）
（ⅰ）事行	（ⅰ）事行
（ⅱ）結果状態	（ⅱ）事行＋結果状態
（ⅲ）元の状態	（ⅲ）元の状態
（ⅳ）所与の事行と空間的・概念的に対立関係にあるもの	
（ⅴ）事行が内包する質や量	

Dolbec の分類（ii），（iii），（iv）に関しては，一元化することが可能で，反復の対象または前提となる要素は「元の状態」に集約することができると考えられる．Dolbec が「（iv）所与の事行と空間的・概念的に対立関係にあるもの」の中で挙げている ressortir や revendre は見方を変えれば「元の状態」の反復になる．事実，Apothéloz はこれらの動詞を「元の状態への回帰」に分類している．

そして，Dolbec の（v）のケースは，従来の分類の「強度」に相当するが，Amiot, Apothéloz は，「強度」は二次的な価値であるとし，わずかな言及に止めている．例えば，Amiot が挙げている動詞は rabaisser, rallonger, radoucir などで，これらの動詞は，元の動詞 abaisser, allonger, adoucir 自体が多少の差はあれ強意の意味を持っており，そうした事行を繰り返すのであるから，RE を付加する際に「強度」という価値を自然と持ち得るのだと述べている．

2. 解決すべき課題

ここで，先行研究の記述で不十分であると考えられる点や今後の課題を挙げてみたい．以下では，RE を付加する動詞とその動詞の表す事行を P を呼ぶことにする．

2. 1. 前提となる事態

Dolbec, Amiot, Apothéloz, Jalenques は，RE の本質的機能が「回顧的オペレーター」，「反復」，「変更」であると指摘していることから，前提となる事態は既に生起した事態であると見ていることがわかる(5)．しかしながら，Franckel の指摘にもあるように，前提となる事態は既に生起した事態であるとは限らない．P の生起時点において認められる事態が前提となる場合もある．次の例では，被る際のフードの位置づけや押し上げる際の帽子の位置付けが前提となっている：

（13）a. Sam ***remonta*** la capuche de son survêtement pour se protéger

des morsures du vent glacé.（G. Musso, 2005, *Sauve-moi*）

b. Il ***repoussa*** son chapeau de cow-boy pour l'enlacer plus étroitement.

2. 2. RE を付加する際に関わる事態の数

2. 1. に関連して，RE を P に付加する場合に関わる事態の数についても検討する必要がある．RE を P に付加する際に，発話者が P の他に別の事態を考慮していることは確かである．しかし，先行研究のように関係する事態が常に三つまたは常に二つであると断言することはできない．例えば，次の例のように，同じ動詞であっても状況・文脈に応じて関わる事態の数が異なる．（14 a）のように，立っていた主体が倒れ，再び立ち上がることを述べようとすると，関わる事態は三つであり，（14 b）のように，元の位置よりも高い場所に位置付けることを述べる場合は，関わる事態は二つである：

（14）a. Je t'ai vu tomber et te ***relever*** en serrant les dents,（. . .）

（M. Levy, 2003, *Si c'était vrai* . . .）

b. Un vent du nord s'était engouffré dans la baie, amenant avec lui une pluie fine et ciselante, il faisait un froid de loup. Il ***releva*** le col de son manteau sur sa nuque.（*ibid.*）

2. 3. 観念的側面からのアプローチ

Amiot, Apothéloz, Dolbec, Jalenques は，RE の機能を論じる際，主に時間的または空間的側面に注目している．確かに，Amiot の記述の中に「通常または本来の状態」の反復といった一種の価値判断に関わる観念的側面からの記述が認められるが(6)，Amiot 自身はこうした説明は曖昧すぎるとしている．

しかしながら，次の例の RE の機能について考える際には，Franckel が提案する観念的側面からのアプローチが必要であると考えられる．以下の例では，前提となる事態が既に生起したとは考えらない．例えば，（15 a）では，事行の反復のような「主体が荷物をポーターに渡したこと」や元の状態の反復

のような「荷物がポーターの手元にあったこと」は前提として存在しない．（15 b）に関しても，「主体が皿を押しやったこと」や「皿がテーブルの中心にあった」という前提はない．（15 c, d）に関しても同様のことが言える．（15 c）では，「主体がスーパーマーケットに入ったこと」や「主体がスーパーマーケットに居たこと」は前提として存在せず，（15 d）でも，「Juliette が天国に連れて行かれたこと」や，「Juliette が天国にいた」という前提はない：

（15）a. À la porte de l'hôtel,（. . .）elle ***remit*** le sac au portier avec une liasse de francs suisses.（A. Rice, 1995, *L'heure des sorcières*）

b. Il était encore tôt lorsque Iselde ***repoussa*** son assiette vers le centre de la table, signifiant la fin du repas.

（D. Bry, 1999, *La seconde chute d'Ervalon*）

c. （自転車旅行者が旅の途中で猛烈な空腹感に襲われ）

J'ai pris une fringale à 5 km de la maison. Je ne pouvais plus rentrer, j'avançais à 3 km/h. Je ***suis rentré*** dans un supermarché.（*Le Parisien,* 2010/7/5）

d.（Juliette は飛行機事故で死ぬはずであったが，飛行機に乗らなかったため命を落とすことはなかった．しかし，数日後，天国からの使者が彼女を天国に連れていくためにやって来る）

— （. . .）ma mission est de ***ramener*** Juliette.

— Où ?

— Là-haut, répondit-elle en pointant son index en l'air.

（G. Musso, 2005, *Sauve-moi*）

以上の例に共通する点として，規範や目的に照らせば，話題にしている場所が主体または対象のいるべきまたはあるべき場所であることが挙げられる．つまり，ホテルで荷物を運んでもらうためには荷物はポーターの手元にあるべきものであり，食事が終わったことを明示しようとすると，皿がテーブルの中心にあることが好ましい．また，食料の購入にはスーパーマーケットはしかるべき場所であり，死ぬはずであった Juliette にとって，天国は彼女のいるべき

場所である．このように，RE の本質的機能を解明するためには，観念的側面からのアプローチが必要であろう．

しかしながら，次の例の retrouver の RE については，どのように説明すればよいだろうか：

（16）a. Décidement, quoi qu'elle entreprenne, elle n'arrivait jamais à être à la hauteur de ses ambitions. Elle voulait être une star de cinéma et elle ***se retrouvait*** serveuse.

（G. Musso, 2005, *Sauve-moi*）

b. André a exercé toutes sortes de boulots avant de ***se retrouver*** à la rue.（*Le Monde,* 2004/2/1）

c. Ce foyer était situé sur une des hauteurs de la ville, et la vue était dégagée. Le terrain, vaste, était entouré d'un mur de béton. Après avoir passé le portail, on ***se retrouvait*** devant un immense keyaki qui se dressait tout droit.

（H. Murakami, 1987, *La Ballade de l'impossible*）

こうした se retrouver について，辞書では「あることの結果，突然ある状況下に置かれる（se trouver soudainement dans une situation à la suite et en conséquence de quelque chose）」（*Le Grand Robert de la langue française*），「（気がついてみれば）ある状態になってしまっている，ある場所に来てしまっている」（白水社ラルース仏和辞典）といった意味が示されている．そして，実例を観察すると，se retrouver を用いる際に話題にされている状況は好ましくないものであることが多い．そうした状況・文脈の特徴や辞書で挙げられている意味が，上で見た話題にする場所が主体や対象のいるべきまたはあるべき場所であることとどのように関連するかについてはさらに検討する必要がある．

2. 4. RE を付加した P のとる事行対象の特性

次の，repousser, rattraper のように，RE を P に付加することにより，事

行対象に具体物だけでなく抽象物をとることが可能になる動詞がある：

（17）a. De nouveau, Roo se demanda si Sylvia rapportait leurs conversations à son père. Mais il ***repoussa cette inquiétude***.

（R.- E. Feist, 2005, *La Guerre des Serpents*）

b. Et aujourd'hui, elle profitait de sa journée sans classe pour ***rattraper le retard accumulé*** ces derniers jours.

（M. Chattam, 2002, *Trilogie du mal*）

実例を観察すると，repousser は人・集団または具体物を事行対象にとる他に，思考に関わる表現を導き，それらは否定的な考えや感情を表すことが多いことがわかる．そして，rattraper に関しても，人や具体物が事行対象になる他に，遅れや損失または過失を対象としてとる傾向にある．

それでは，なぜ P に RE を付加する場合に，抽象的な事行対象をとることが可能になるのか，また，事行対象はどのような特徴があるのだろうか．そして，その際に発話者が行う操作はどのようなものかについても明らかにしてみたい．

2. 5. 認知動詞に関する考察

従来の研究では，物理的な動きを表す動詞を中心に考察がなされ，reconnaître, redouter, ressentir など認知動詞についての記述は十分になされていない．これらの動詞も網羅した一元的な RE の機能についての記述も今後の課題としたい．

2. 6. RE を付加することのできない動詞

最後に，Franckel は RE を付加することができない動詞として，aimer や savoir のような状態動詞の他に aller, cesser, finir, agrandir を挙げている．こうした動詞が表す事行の反復を述べようとすると，encore, à nouveau や次の例の de nouveau などの表現を用いるようである(7)：

（18）（妻を亡くし，次の恋愛に踏み切れないでいる相手に対し）

J'ai été marié trois fois et je peux vous assurer que, si vous avez déjà aimé sincèrement une fois dans votre vie, vous avez toutes les chances d'***aimer de nouveau.***（G. Musso, 2005, *Sauve-moi*）

このように，RE を付加することができない動詞がどのような特徴を持ち，なぜ RE を付加することが不可能であるかについても明らかにする必要がある．

3. おわりに

本稿では，まず先行研究の指摘を概観し，RE の本質的機能についての四つの仮説を見た．そして，次に，先行研究の記述で不十分であると考えられる点として以下の点を挙げた：

1）前提となる事態は，P の生起時点より前に生起した事態に限らず，P の生起時点において認められる事態も前提となる．

2）RE を P に付加する際に，関わる事態は常に三つまたは常に二つであると断言できず，同じ動詞でも用法によって関わる事態の数が異なる．

3）RE の本質的機能を明らかにするためには，時間的または空間的な側面から見るだけでは不十分であり，観念的側面も考慮する必要がある．

そして，今後，RE の付加により，事行対象に具体物だけでなく抽象物をとることが可能になる動詞や認知動詞さらに RE を付加することが不可能な動詞を考察することにより，時間，空間，観念の三つの次元を網羅する RE の本質的機能を明らかにしていきたい．

注

(1) re, r, ré を総括し，以下 RE と記す．

(2) 上の五つの分類に加え，1）の意味が拡張されて対立（l'opposition）といった意味が生じると記されている．

(3) 同じような観点から，Fuchs（1992）では，反復を表す場合の encore と RE の差異について次のように論じている．

（ i ）La ville s’est encore peuplée.

（ ii ）La ville s’est repeuplée.

両者とも反復を表しているが，発話の解釈は異なる．encore を用いた（ i ）では，町の人口がさらに増加したことを述べている．一方，（ ii ）は，一度減少した人口が再び増加に転じることを述べるものである．このように，encore が表す反復は「増進」であり，一方，RE の表す反復は「元の状態への回帰」といった価値を持つ．このことから，Fuchs は RE は回帰のオペレータ（opérateur de mouvement de retour en arrière）と呼んでいる．

(4) Apothéloz（2005）も反復の対象として 4 つの要素を挙げているが Amiot と分類方法が異なる．Amiot の（ i ）のケースを反復が動詞のどの結合価に係るかに応じて 3 つに下位分類し（itération du procès, itération de l’événement, itération d’activité），（ ii ）−（ iv ）を一つの項目（itération d’un paramètre du verbe base）にまとめている．

(5) Gerhard-Krait（2010）にも同様の記述が認められる：

L’existence d’une occurrence antécédente, qu’elle que soit instanciée dans le discours（. . .）ou non, signifie que re- s’appuie bien sur quelque chose qui a déjà eu lieu, et donc qu’il y a forcément un ancrage contextuel, un formatage en amont.（Gerhard-Krait, 2010 : 262）

(6) Amiot は次のような例を挙げている：

（ i ）Il faudrait redresser cette plante avec un tuteur.

（ ii ）On nous a conseillé de reblanchir la pierre en utilisant un karcher.（Amiot, 2002 : 12）

植物は通常真っすぐ伸びるものであり，石碑は本来白または明るいものである．この例では，そうした「通常または本来の状態」が反復の対象であると Amiot は指摘している．

(7) 必ずしも RE の付加が不可能というわけではないようだ：

Pensez-vous qu’on puisse “ré-aimer” une personne pour laquelle on n’a plus de sentiments?（Web）

しかしながら，上の例の aimer が「状態動詞」であるかは議論する必要がある．

主要参考文献

D. Amiot（2002）, «Re-, préfixe aspectuel», *Cahiers* Chronos 10, Amsterdam, Rodopi, 1–20.

D. Apothéloz（2005）, «*RE*- et les différentes manifestations de l’itérativité», *Pratiques* 125/126, 48–71.

J. Dolbec（1988）, *La préfixation en français, essais de théorie psychosystématique et application au préfixe re-,* thèse de doctorat nouveau régime, Lilles III : A. N.R.T.

J.-J. Franckel（1989）, *Etudes de quelques marqueurs aspectuels du français,* Genève, Droz.

————（1997）, «Approche de l'identité d'un préverbe à travers l'analyse des variations sémantiques des unités préverbes», *French Language Studies* 7, 47–68.

C. Fuchs（1992）, «Modulations qualitatives sur l'itération, les emplois concurrentiels de encore et de re», in J. Fontanille（éd.）, *La quantité et ses modulations qualitatives,* Presses Universitaires de Limoges, 129–142.

P. Jalenques（2001）, «Quand la diachronie renvoie à la synchronie : étude des emplois idiomatiques du préfixe re- en français（*renier, remarquer, regarder,* etc.）», *Recherches linguistiques de Vincennes* 30, 39–61.

————（2002）, «Étude sémantique du préfixe RE en français contemporain : à propos de plusieurs débats actuels en morphologie dérivationnelle», *Langue française* 133, 74–90.

F. Gerhard-Krait（2010）, «Les verbes en re- itératif : sens construit et interprétation en discours», in Álvarez Castro C., Bango de la Campa F., Donaire M. L.（éds）, *Liens linguistiques. Études sur la combinatoire et la hiérarchie des composants,* Bern, Peter Lang, 255–269.

L. Mascherin（2007）, *Analyse morphosémantique de l'aspectuo-temporalité en français.* －Le cas du préfixe *RE* －, thèse de doctorat, Université de Nancy 2, ATILF.

小熊和郎（1991）,「接頭辞 re– と発話操作」『西南学院大学フランス語フランス文学論集』27, 西南学院大学, 111–138.

Grand Larousse de la langue française

Le Grand Robert de la langue française

Le Robert Brio

白水社ラルース仏和辞典

——大学院文学研究科研究員——